

季節外れの紫苑

中学二年 K・A

自分の名前を、忘れた

水の飲み方を、忘れた

歩き方を、忘れた

生きる意味を、見失ってしまった

何もない私の世界で、たった一つ色づいて見える人がいる

その子は髪が白かった

あなたは誰？

きっと、大切な人

特別な人

薄れていく視界の中で、君はただ

微笑んでいた

まぶしいくらいの日差し。この季節でこんな日差しなら、夏はきつとまぶしすぎて目も開けられないだろう。思い切って上着を脱いできたが、風はまだ冷たい。やっぱりに中に戻ろうか。

入口まで戻るとそこには見慣れない子たちが十人ほどいた。

ああ、なるほど。もうそんな時期になったのか。ということとは、私がここに来てもう4年。今まで何人の人と悲しみを分かち合ったのだろう。ひよつとしたら、百人を超えているかもしれない。いや、流石にないか。

その子たちを改めて見ると、そわそわしている子に周りを警戒している子、年下と思われる子から明らかに年上の子まで様々だ。

その中で、飛び抜けて背の高い子がいる。170^〇は超えてい
ると思う。それだけでも目立つのだが、その子には、もう一つ周りと違うところがあった。

髪の毛が白い。

それに、後ろで長そうな髪を束ねているからきつと女の子だろう。あんなに背の高い女の子もいるのか。

その子を見ていると彼女と目が合った。私は反射的に笑顔を向ける。変な人だと思われただろうか。でも、彼女は笑顔で返してくれた。

その後しばらくすると、一人の女性がこちらのほうに向かって走ってきた。手元にはパンフレットのようなのが見える。あれは確か、モモカ先生。彼女は多分ここで一番若い。先生はこれが初めての大仕事だからか、顔が固まっている。普段から表情が硬いが、今日はそれが一段と増している。大丈夫だろうか。彼女はその頬を二回ペチペチと叩くと、入り口にいる子たちに向かってしゃべり始めた。

「よ、ようこそ。希望^{きぼう}ノ先病院^{さきびょういん}、光棟^{ひかりどう}へ！みんなにはこれからしば

らく、いろんなお友達といっしょにここで暮らしてもらいます！

ここには小学五年生から高校三年生まで五十人ほどがいます。

み、みんないい子たちですよ！えつと………み、みんなが持つ

ている病氣と同じようなものをこの子たちも持っています。なので、何かあってもすぐに先生たちが助けてあげます！何か困ったことがあったら、すぐに言ってください！

それではまずここを案内するので食堂へ行きましょう！…アツその前に、そこに荷物を置いてきてください！えー、そこついでうのはえつと……」

モモカ先生、すっごい早口だし、声も時々裏返っている。周りの先生も心配そうな表情をしている。そのとき、一人の先生が私を手招きした。その先生に近づくと、申し訳なさそうな顔で言った。

「突然ごめんね。モモカ先生あんな調子だし、聞いている子たちもみんな心配そうな顔してるから、ここ案内するの、手伝ってくれない？」

たしかに私はここにいて長いし、モモカ先生をこのままにしていたら、何が起こるかわからない。できるならば手伝ってあげたい。でも、正直モモカ先生と一緒にいたくない。あの先生といると、何かトラブルに巻き込まれる可能性がある。それで、所長室に呼び出されることなんてあったら、たまったもんじゃない。今回は自分の安全を優先させてもらおう。

「先生、すみません。手伝いたいのは山々なんですけど…」
「きやああああ！」

強風とともにモモカ先生が悲鳴を上げた。先生のほうを向くと、手元にあったはずのパンフレットが一枚残らず宙を舞っていた。私も先生たちも驚き、固まっていた。そんな中、一枚のパンフレットが空を飛び、私の顔のもとに飛んできた。私は急いでそれをはがすと、前にいるモモカ先生が慌てて落ちたパンフレットを拾っている。その様子はいつパニック状態に陥るかかわからなかった。とても一人じゃやっていけそうにない。周りに目を向けると、さつき声をかけてきた先生がこちらへ手を合わせて見ている。ほかの先生たちもパンフレット拾いを手伝いながら、私をチラチラ見ている。

目もむけられない状態の先生。心配そうにしている子供たち。助

けを求める先生たちの目。

そこにはもう、私の拒否権なんてなかった。

結果から言うと、奇跡的に所長室送りは免れた。モモカ先生は説明中早口だったり、間違えたりするのはもはや当たり前になつていた。道を間違えるなど私たちをヒヤヒヤさせることはたまにあつたが、それでも無事にやり遂げた。あとは、いくつかのグループに分かれて細かいことを説明するだけだから、トラブルに巻き込まれることはないだろう。

グループに分かれたとき、私のところには年下の元気そうな男子と、さつき見た白髪の子が来た。

「それでは最初に自己紹介をしましょう。まずは私から。瀬戸内しおんといえます。しおんはひらがなです。四月から中三になります。私はここにきて四年たちます。ここにいる人達の中で一番長いので、何でも気軽に言ってください！」

「俺は式見 真太郎しんたろうつていいいます！入学式の式に、見学の見で式見。真太郎は真剣の真に桃太郎の太郎です！新小五です！外で遊ぶのが好きです！よろしくお願いします！」

「僕は瀬戸内せとうち 涙なみ。涙なみって書いてルイと読みます。新高一です。みての通り僕は髪の毛が白くて長いけど、男です。よろしくお願いします。」

「瀬戸内くん？と私って名字が一緒ですね！なんか運命みたい！」
「僕のごとは涙なみって呼んでいいよ。それに堅苦しいからタメ口で。これからしばらく一緒にいるし。」

「じゃあ、涙なみくんと真太郎くん。最初は私が好きな花壇へ行きましょう！」

涙なみくんって男の子だったんだ。どうりで背が高いと思った。

花壇の前に着いた。今はまだ寒いから花壇には何も生えていない。「この花壇には、今はまだ何もないけどもうすぐしたらきれいな

花がたくさん咲きます！お手入れはみんなで順番にやっています。何か質問ある？」

「はい。しおんさんの好きな花は何ですか？」

「私？私は、自分の名前にもある紫苑かな。秋の花だからここにはまだしばらく咲かないけど、小さくて素敵な花だよ！」

「もしかして、その前髪に付けてるピンの花も紫苑？」

「そうだと思う。いろいろあつてよく覚えてないんだけど……。あつ、もうそろそろ次に行く時間だ。涙くんは質問大、丈……夫？」

「うん。大丈夫だけど。しおんちゃんの方こそ、何かあった？」

「えっ？ いや、なんでもない。次のところ行こっか。」

一瞬涙くんの表情が悲しいような、悔しいような感じになっていた。私が疲れているだけだろうか。

いや、きつとそうだ。モモカ先生と一緒にいて疲れたんだ。

私は気を取り直して、次の目的地へ一歩踏み出した。

自分の部屋に戻ってくると、カーテンが激しくなびいていた。私は急いで窓を閉じ、ベッドに飛び乗った。

あの後無事に案内を終え、二人とは別れた。最後、手伝いをしてくれたお礼にとチョコと余ったパンフレットをくれた。

それにしても、あの苦労の代償がチョコ一個とはどういうことか。チョコだよチョコ。もっと思春期の女の子が欲しがりそうなものを持つてないのか。パニックしかけている先生を落ち着かせるところから始まり、最後には私がほぼ全部説明したんだぞ。その苦労がわからないのか。

大体、個々の大人たちは私たちを下に見すぎている。小学校低学年ではないのだから、もつと対等に扱ってほしい。あの言葉遣いも幼稚園の遠足ではあるまいし。

「……でもまあ、それも死ぬまでの話だし。」

手元にあるパンフレットに目を落とし、それをぺらぺらとめくる。

所長や先生たちからの言葉、この病院の説明や、施設の地図。先生たちの名前に、ここでの禁止事項、その他もろもろ。そして最後にはここ、希望ノ先病院のなじみのスローガン、

『希望ノ先ヲ目指シテ』

と書いてあった。普通ひらがなのところがカタカナになっているのは、昔から続く歴史を重んじているらしい。

けど本当は、この施設には希望なんでもものはないし、ましてや希望の先なんていけやしない。それはなぜか。理由はここ希望ノ先病院光棟、隣にある陽棟ひなたどう、耀棟ようどうを含む三つの施設に入居している人は必ず、入ってから五年以内に死んでしまうから。

原因不明や不治の病。原因がわかっていても治療法、薬が開発されていない人。そういった人たちは病院では人が多すぎて扱いきれないため、ここに入る。何年も前に親から聞いたことだ。でも実際、大體の人は一、二年で死んでしまう。涙くんや真太郎くんも例外ではない。ここに四年もいるのは両手に収まるくらいしかない、と誰かから聞いた気がする。

今年で五年目、つまり余命は約一年。あと一年たてば、この施設とも別れられる。まあ、それより前に大切なものを失ってしまうけれど。

ここ光棟、小学四年生以下が入っている陽棟は病気が治らないのを子供に話していない親も多いため、施設側は私たちが要求しない限りそのことについて触れない。そういう決まりだ。

正直、死ぬのは怖い。いつ死ぬかわからないし、何より目に見えて死に近づいていることが私の場合わかってしまう。この頭につけている包帯も取り換えてはいるが、一日中外したことはない。

だめだ、だめだ。こんなことを考えると気が滅入る。それに、さつきから急に眠くなってきた。案内の時の疲れだろうか。ひとまず、私は寝ることにした。

私は公園に来ていた

誰かと遊んでいる

目線が低いからまだ幼いのだろう

私たちはおままごとをしていた

たぶん私が子供か妹の役で、相手が親か姉、もしくは兄役だろう

相手の顔はぼやけててよく見えない

でも髪が長いことはわかる

その子は私の髪を結んでくれている

あの子は誰？

思い出せない

これも症状の一種だろうか

ぼんやりした意識の中で一つの声が届いた

『じっとしててね』

「あつ、やっと起きた！しおんさん、大丈夫？変な夢でも見た？全然起きなかつたけど。」

「あくうん。だいじょうぶ。心配してくれてありがとね。」
私は寝ぼけた声でしゃべった。

窓に目をやると、空がほんのりオレンジがかった。たぶん昼寝してから二時間くらい。思ったより寝ていた。

隣を見ると、真太郎君がいた。さっきの声の主は彼だろう。

私はベッドからゆっくりと起き上がりながら考えた。

そういえば、さっきどんな夢を見たっけ。何か見た気がするけど、まったく思い出せない。まあ、そんな日もあるか。

私は目をこすって、真太郎君に話しかけた。

「真太郎君どうかした？案内中に何かなくしちゃった？」

「いや、俺ではないんだけど、これ。帰るときに見つけて。」

真太郎君はズボンのポケットをガサゴソといじって、一つのものを取り出した。

「これって、しおんさんの？」

それは、ヘアゴムらしきものだった。薄紫色のゴムに白い鈴と、『S.R』と書かれた小さなチャームがついていた。

「うーん。残念だけど、私、髪はあんまり結ばないから違うかな。」

「そっかー。じゃあ、やっぱり涙さんのかな。」

「たしかに髪結んでたし、予備とかでポケットとかに入れてたのかも。」

「じゃあ、俺、届けてくる！えーっと、確か涙さんの部屋は。」

その時、廊下から女性の声が聞こえた。

「しんたろー！荷物運ぶの手伝ってー！」

「あつ、母ちゃんだ。俺、行かなきゃ。でも、これどうしよう。」

「私が届けようか？」

「ほんと？俺、さっき無理やり起こしちゃったから、まだ眠かったりしない？」

「ううん、大丈夫。真太郎君はお母さんのところ行っておいで。」

「わかった。ありがとう！しおんさん、またね！」

真太郎君はそう言って出て行った。

または、もうなかつたりして……。

そんなことより、早くこれを届けなさいと。

私は手ぐしで髪を整えて、立ち上がった。

涙くんの部屋はどこだっけ？

案の定迷子になった。こうなることを想定して、万全の準備をした……はず。

勢いよく部屋を飛び出したけど、ずっと同じ部屋と廊下、階段でよくわからなくなり、しまいには涙くんの部屋まで忘れてしまった。今はこうして床に座っている。周りを見ると、さっきまでいたはずの先生や子供の姿はもうない。近くにある部屋に人の気配はない。さっき見た階段の壁には4と書かれていた気がするから、ここは四階だろう。

これからどうしようか。やっぱり階段を下って、誰か先生を探すのが一番効率的だろうか。そう思って立ち上がった時、

「へつくしよん!!」

という、くしゃみが聞こえた。それは、すぐ近くの部屋から聞こえてきた。どうやら人の気配がないという私の勘は間違っていたらしい。

私は声が聞こえた部屋に近づき、開いているドアから中をのぞいた。

「!!」

そこには白く、長い髪をなびかせた一人の青年がいた。その姿は、どこか懐かしい雰囲気でした。

その青年は人気を感じたのか、こちらをゆつくりと振り返った。

「あれ？しおんちゃん？」

部屋の外には、
『四三三——瀬戸内 涙様』
と書かれていた。

「……っていうことがあったんだ。」

少しだけ空いた窓からは、心地よい風が流れている。

私は、涙くんがいるベッドの隣にある丸い椅子に座っていた。

あれから数分後、私は真太郎君と話したことについてしゃべっていた。涙くんは私がヘアゴムを見せると、大事なものなんだ、ありがとうと言ってそれを受け取った。

「そうなんだ。あとで真太郎君にもお礼言わなくちゃ。」

「それにしても、こちら辺、誰もいないんだね。」

「それ、僕も気になっていたんだ。何か理由があるのかな。」
迷子になっているとき、近くの部屋をいくつか覗くと、入り口近くの低めの棚はだいぶほこりをかぶっていた。ということは、しばらく誰も使っていないはずだ。

ふと時計を見ると、その針は五時四十分を示していた。部屋を出たときは五時十五分だったから、二十分さまよっていたことになる。中三にもなって、こんなにも長い間迷子とは恥ずかしい。

「そういえばしおんちゃん、さつき髪あんまり結ばないって言ってたけど、そういうのには興味ないの？」

「いや、興味はあるんだけど、私のお母さん昔から髪が短くて、髪結んだりとかあんまりできないの。それで私も、じゃあいいやつてなってる。」

「そっか。じゃあさ、ゴム届けてくれたお礼に髪結んであげようか？
僕、そういうの得意なんだ。」

「えっ!! 本当!!」

思わず身を乗り出してしまった。

実はここに来る少し前に通っていた学校で、おしゃれとかフアツ

ション雑誌が流行っていた。私も興味があったけど、いつの間にかここに入ることが決まってあきらめていた。まさかあの時の願いが、ここでもかなうなんて思っていなかった。

「その反応は、やってもいいってこと？」

「えっ、あっ、うん！お願いします！」

「よし、久しぶりだし頑張るぞー。」

それから涙くんは、私の髪を結ってくれた。集中しているのか言葉が発さない。私は自分の髪型がどうなっているのかわからないから、そわそわしていた。すると彼はそれが気になったのか、久しぶりに声を発した。

「髪が乱れちゃうから、じっとしててね。」

その声は、どこか懐かしい気がした。

「よし、できた。はい、鏡。」

涙くんは小さな鏡をくれた。

私はドキドキしながら自分の後ろ髪を映した。

「うわあ………！」

そこには丁寧に編み込まれた自分の髪があった。

普通の女の子からしたらただの三つ編みに見えるかもしれないけれど、私には宝石で飾り付けられたようにきらきらして見えた。今なら病気も治って、いつまでも生きられるように思えた。

「魔法みたい……。あれ？このゴム、花がついてる。」

「ああ。自己紹介の時しおんちゃん、紫苑の花が好きって言ってたでしょ？それでたまたま紫の花のヘアゴム持ってたから、つけてみたんだ。気に入った？」

そういうことだったんだ。涙くん、よく私の自己紹介のこと覚えてたなあ。私だったらすぐに忘れそう。

それにしても、シンプルな髪型だけど丁寧でとても綺麗だった。

私もできるようになりたい。

ふとそんな考えが浮かんだ。もし、私もこれができるようになれ

たら。そうしたら、残り少しの人生がもっと楽しくなるかもしれない。

「ねえ、もしよかったら、私にも髪の結び方教えてくれない？」

「!？」

涙くんは驚いたのか、目を見開いている。

やっぱり迷惑だっただろうか。でもまあ、それで私がもっと長く生きられるわけでもないし。

「……っははは！いいよ、やってあげても。」

「え？」

「教えてあげてもいいよ。それに今日楽しかったから、また結んであげてもいいよ。」

「………ええ!?!？」

花壇の前に座っている

隣には、見たことあるようなぼやけた顔

花壇にはよく知っている紫苑の花がたくさんある

私はそのうちの一つを指して何か言っている

それに対してとなりの子も何か言う

二人の会話がしばらく続く

突然、後ろから声を掛けられる

振り返ると大人の人がいた

顔は何かで黒く塗りつぶされている。

私となりの子は立ち上がり、その人のそばに行く

横を見ると、となりの子は悲しげな顔をしている

のは、私の勘違い？

「わぁ……すごい……！」

あれから数日、私は毎日涙くんのもとへ通っては、髪結び方を教えてもらっている。それでたまに私の髪を結んでもらっている。彼は、ゆっくり丁寧に教えてくれた。前にも誰かに教えてもらった気がするけど、また忘れてしまったのだろう。

そういえば、この何日かの間にくっつかかったことがある。まず、涙くんは食堂では食事をせず、いつもこの部屋で食べている。私たちは原則として、食事は食堂でほかの子たちと一緒に摂っている。私はほとんど風邪をひかないので、自分の部屋で食べるなんてめったにない。だから、涙くんのこととは逆にうらやましい。

二つ目は、彼はこの施設の中で隔離されていること。前ここに来る前に四階の部屋をすべて見て回ったのだが、倉庫で先生が作業をしている以外人はいなかった。

あくまで私の予想だけど、これらの理由は病気の症状がひどいからだと思う。でも、彼は苦しそうな表情は一切見せない。

私の前では我慢してるのかな。
もしそうなら、少しでも彼を元気づけられるようにしたい。

「しおんちゃん頭の包帯って、病気と何か関係あるの？」

突然言われてびっくりした。今まで、そんな話は会話の中に一度も出てこなかった。もしかしたら彼は、私が楽しんでいる姿を見て気を使っていたかもしれない。

「……えっと、私ね、記憶に障害があるの。小4の時にトラックにはねられて、頭ケガしたんだ。その時の傷がまだ残ってるから、包帯を巻いているの。それで記憶に障害っていうのは、事故の時に脳が傷ついちゃって、それまでの記憶がほぼ全部なくなっちゃって。覚えていたのは、家族のことくらい。一時期学校にも行ってみただけど、友達のこと全然覚えてなくていじめられたんだ。その時くらいから、事故のこととかも忘れていくようになって。私、今までのこと以外にも大切なこととか忘れていくよ。うな病気だったらいいの。だからいづれ親のことも、先生たちのことも忘れて。食えることや寝ることも忘れていつて。それでいつかは死んでいく。だからこの施設に入ったんだ。」

「……」
そうだ。私の人生にハッピーエンドなんてない。だからこそ、毎日を少しでも楽しめるように努力する。それが、私が四年前に出した答えだった。

私はゆっくりと息を吐く。ここまで病気のことを誰かに話すのは初めてだった。少しすっきりした気がする。

「そっか。なんかごめんね。辛いこと、話させて。」

「ううん、私こそごめん。こんな話、あんまり聞きたくなかったよね。」

「……あのさ、僕も自分のこと、少し話していいかな。なんか、話した方が気が楽になる気がして。」

「！」

まさか、彼から話そうとするなんて。もしかしたら、これを聞いて、彼のことを楽にさせてあげる方法がわかるかもしれない。

「聞いたくなかったら言ってみてね。実は僕、右腕から花が咲くんだ。」

「……え？」

「やっぱり信じてもらえないよね。でも、本当なんだ。こっち来て見てごらん。」

私は半信半疑で彼に近づき、腕をのぞき込む。

「……！！」

そこには、肘のあたりから小さな子葉を付けた植物があった。

「花咲病はなさきびょうって言うってね、この花に僕の体の中の栄養とか水分がほとんど吸い取られて、花が咲くところに死ぬっていう病気なんだ。」

「……苦しくはないの？」

「芽が生えたてのころはすごい痛かったけど、今はもう慣れちゃった。」

「……どんな花が咲くの？」

「わからない。今までこの病気になった人たちが咲かせた花は、全部ばらばらなんだ。だから、この花が咲くまでわからない。僕はその花が美しく咲いたかどうか見られない。少し悔しい気がするけど、仕方のないことなんだ。」

痛みはないと聞いて少しは安心したが、そのあとの言葉は聞いている私も苦しかった。

でも、と私は思う。

「なんかさ、私たちの症状って少し似てない？死ぬときの自分のことがわからない、みたいなの。なんかうまく伝えられないけど。」

「……たしかに……」

私は死ぬとき、すべてを忘れて自分のことがわからなくなる。涙くんは死んだ後に花が咲くから、自分の最期の姿はわからない。気のせいかもしれないけど、どこか接点を感じる。

空がピンク色に染まる。この幻想的な景色は何度見ても飽きない。今はどんな生き物でも静かに息をして、世界がいつもよりゆっくり動いている気がする。もしも、本当に時の流れが遅くなったら。空を飛べたり、何かを楽しむ時間も増えるかもしれない。でも、私が一番望むものは、

ギョルルルルルル…

「あれ、おなかすいちやっただ？夜ご飯までもう少しあるけど。」

なぜ、私のおなかは空気を読まないのか。今、いい感じの BGM が流れそうな雰囲気だったのに。

「ああ、久しぶりにお母さんが作ったカレー食べたーい。」

「僕もまた、おばあちゃん特製のスタミナ丼が食べたいなあ。」

「え？おばあちゃん？スタミナ丼？」

おもわず口に出してしまった。おばあちゃんがスタミナ丼作るって、なんかギャップが凄そう。

「そうだよ。僕、見た目より良く食べるねってよく言われてたんだ。」

小学校の時は、毎日のように給食おかわりしてたし。たぶん、ここでのご飯もみんなより少し多いと思う。」

「へ、へえ〜」

みんなおなかいっぱい食べられるように、といつも多めによそつてくれるご飯を大盛りにするなんて。いつも席が近い男子も、普通の量でおなかいっぱいっていうのに。

涙くん、恐るべし。

「でも確かに、涙くんがおばあちゃんのご飯食べてるって、なんか納得する。」

「そう？僕の家、僕が小さい頃に親にいろいろあって、この間までずっとおばあちゃんに育ててもらってたんだ。でも、もう八十歳過ぎたから老人ホームに入ることになって。それも、僕がここに来た理由の一つ。」

花咲病って、昔の環境とも関係があるのかな。あとで調べてみよう。

体全体が宙に浮かぶような感覚を受ける。

刹那、全身の力が抜け、私は倒れた。横から、ガシャンという何かをひっくり返したような音が耳の中に響く。

体は動かず、脳がまひしたような状態に陥る。

次第に瞼が重くなり、私はこの世界から意識を遠ざけた。

となりの子はさつきから自分の服を握りしめ、下を向いていた

顔が黒く塗りつぶされたよくわからない人の話を、私は隣の子と一緒にしばらく聞いていた

でも、私にはその声は聞こえなかった

その子は肩が小刻みに震えている

泣いているのだろうか

私は小さな手でその頭をやさしくなでた

それは、以前もどこかで触ったような気がした

たぶん、割と最近に

その日の朝食前は、私を含む子供たち全員が緊張した表情をしていた。理由は、めったに私たちに顔を見せないこの施設の所長^{ボス}、サ

サキ ユリ先生が立っていたから。私の経験上、この人が立っている朝は、たいていいい知らせがない時だ。良い知らせだといいいけど。でも、私の考えが裏切ることなんてなかった。

「昨日は大丈夫だった？」

「何のこと？」

「……やっぱり何でもない。」

部屋に入ると、開口一番にそう言われた。昨日は確か、私がカレーを食べたいなんて言ったせいで、涙くんが暴走しかけたことがあっただけだ。そんなことより、と私は今日一番のニュースを切り出す。

「またここから脱走しようとした人がいたの、知ってる？」

「何も聞いてないけど。」

意外だった。ササキ先生の言葉が届いていないなんて。彼は脱走しなさそうだから、伝えてないのだろうか。

「実は昨日ね、ここから脱走しようとした男子たちがいて、森で大ケガしたんだって。今、病院で治療受けてるけど、命に問題はないらしいよ。」

ここにある希望ノ先病院を含むそれ関係の施設は、すべてこの丘のような場所の上にある。ミニ盆地みたいな感じになっていて、周りは森に囲まれている。それが人工なのか天然なのかは知らないが、そこはかなりうっそうとしていて。一本道を間違えたら、熊でも出てきそうな雰囲気だ。

「そんなことがあったんだ。全然知らなかった。でも、なんで逃げようと思ったんだらう。僕はここ、すごいいいところだと思うけど。」

それもそのはず。ここにいる人、全員の最期の場所はここになる。最期は幸せになりたい。誰もがそう思うはずだ。そのため、ここはとても快適な空間になっている。

おいしい食事に、街全体が見渡せるステキな部屋。最新のゲーム機器までそろっている。どうしてこんなところから逃げようとする

のか。多くの人が疑問を持つ。

「それは多分、私の予想だけど脱走しようとした子たちは、現実が受け入れられないんだと思う。私とか涙くんみたいにここが最期の場所だってわかっていている子たちは、周りの子がばたばた死んでいっても仕方ないことだって納得できる。でも、そのことを知らない子たちは、周りの子がどんどん死んでいったり、目の前で友達が倒れたりするのを見ると、ここは呪われているって思うかもしれない。そういう子たちがここから逃げようとする。だから、こんなことが頻繁に起こるんだと思う。」

施設側はこのような事件を避けるために、ここが最期の場所だと伝えたい。だけど、親たちは子供を悲しみから守るために、それを伝えようとさせない。

私は親にここになぜいるのかを、私が入所してから一年後くらいに教えられた。その頃の私は、仲のいい子たちがどんどんいなくなることには不信感を抱いていた。だから、もし私の親がこのことを伝えてくれなかったら、私もここから脱走しようとして大ケガをしていたかもしれない。

「涙くんはもし、ここで死ぬことを知らなかったら、ここから逃げようとしてたと思う？」

「いや、ずっとここにいると思う。」

涙くんはきっぱりと否定した。

「どうして？」

「だって僕は、ここで大切なものに会えたから。」

「大切なものって？」

「うーん、内緒。」

涙くんの大切なものって、何だろう。どうせもう死ぬのだから、教えてくれてもいいのに。

今日の午後は、一週間ぶりに親がお見舞いに来る日だった。朝、

先生に今日何か楽しみなことがあるのか、と聞かれたくらい私はそわそわしていた。

私の親は一週間に一度、ここに会いに来る。私の家はここから少し遠い、らしい。そのため週に一度しか会えない。

私のお母さんはとてもパワフルだ。いつもショートカットとは思えないほどに髪を揺らし、動き回っている。メイクが少し濃いのが、やさしいお母さんだ。

お父さんは、見た目は強面だが性格は割と内気。いつもお母さんに負けている。でも私が事故にあったとき、一番に病院に駆けつけてくれた。それだけは覚えている。

私は一人っ子だから、この二人からはとても愛情深く育てられた。なのに恩返しできないのは、この人生一番くらいの後悔だ。来世が億万長者だったら、二人に三億円ずつはあげたい。

「やっほー、しおん。元気してた？」

そうこうしているうちに、お母さんがやってきた。彼女は、私のベッドの近くの椅子に腰を下ろした。

それからしばらく、二人で話していた。

「そういえばね、最近新しい友達ができたの。」

「だれだれ？どんな子？」

「瀬戸内 涙くんっていう高一の男子んだけど、髪が雪みたいに真っ白で長い。それで涙くん、髪結ぶのがすごい上手なの。いつも私の髪結んでもらったり、髪結び方教えてもらったりしてるんだ。」

「へえー。母さん、その子に会ってみたいなあ。」

「そういえば、今日涙くんは検査をしているらしい。」

「じゃあ今度、髪ゴム買ってきてあげるね。」

「やった。ありがとう！」

「それじゃあ、もう母さん帰らなきゃいけないから。しおん、またね。」

「うん。また来週。」

楽しい時間は、あっという間に終わってしまった。もし、私が病

気にならなかつたら、どうなっていたらだろうか。毎日三人で食卓を囲み、学校であったことを話し、笑いあう。それがどんなに楽しいことか、私はもう忘れてしまった。そして、それを思い出せる日はもう来ない。わかりきっていることだ。

お母さんが帰ってからしばらくたった。暇を持て余した私は、テレビでも見ようかとリモコンに手を伸ばす。

でも、その手はリモコンには届かなかつた。

突然腕がだらんと垂れる。

なんだ、これ。

頭が回らない。私はそのまま自分の枕へ顔を沈める。瞼が重くなる中、一つの考えが浮かぶ。

眠気………？

でも、なんでこんな急に。

私はその答えが出せないまま、眠りの世界に入った。

私も私の目の前にいる子も涙を流していた

理由はわからない

涙は地面に次々とシミを作っていく

すると、後ろから車がやってきた

その車は私の近くに止まり、中から人が出てきた

それは紛れもなく、お母さんだった

なんでお母さんが？

その理由はわからないまま、彼女は私の手首をつかみ

半ば強引に私を車の中に入れようとする

私はそれに対し、抵抗していた

でも、小さな子供が大人になんてかなわない

車の後部座席に入れられるとすぐ、私は横の窓から一緒に泣いていた子を見る

その子はもう泣き止んでいた

そして気づくと、私の手にはしおんの花が握られていた

車が動き出した

その子は笑いながら、私に手を振っていた

でも私は泣いていて、振り返すことができない

いつの間にか私の心には、別れたくないという思いが広がっていた

今初めて会ったはずなのに

この感情は何だ？

変な夢を見た。幼い私がお母さんに車に乗せられ、どこかへ連れていかれる夢。昨日会って楽しく話したばかりなのに、どうしてこんな夢を見てしまうのだろう。

外に目をやると、雨がさつきより強くなっている。久しぶりの雨のような気がした。

時刻は大体午前十時。今日は外に出て散歩でもしようかと思っただが、雨ならば仕方ない。天気は誰にも変えられないのだから。

私は基本的に、午前中は外に散歩に出たり、自分の部屋で本を読んだりする。それで午後は昼寝や友達、先生などと話して時間をつぶす。五時くらいになったら、涙くんの部屋へ行って髪の毛の結び方を教えてもらったりする。余った時間は会話を楽しみ、六時半になったら食堂へ行く。それが私の一日の過ごし方だった。

本を読もうと思ったが、昨日の夢のせいで夜寝つきが悪かったのか、眠くなってきた。私は布団をかぶり、目を閉じた。

私はどこかの道を歩いていた

車道には多くの車が行き交う

空にはきれいな青空が広がっていた

気温は高いが、時折吹く風は冷たく気持ちいい

木の葉は黄色く色づきかけていた

私は横断歩道を渡るため一歩前に進む

すると突然、キキーツという黒板を引っ掻いたような嫌な音が周囲に広がっていった

私は気づくと右半身の鋭い痛みとともに宙を舞っていた

その直後、頭にバットで殴られたかのような痛みが響く

周りには人ばかりができ始めている

あれは誰なんだ

怖い

痛い

目の前がブラックアウトした

目が覚めた。全身にじっとりとしたヤな汗をかいている。私はひとまず着替えようと新しい服を出す。

あの夢は明らかに五年前の事故を表していた。でも、私には事故の記憶はもうなく、何年か前に親から話を聞いたただけだ。それなのになぜ、こんな夢を見たのだろう。親の話から私の脳が勝手に作っただけなのだろうか。でも、それにしても時期が遅すぎる。普通は話を聞いた日くらいに夢に出ると思う。

なんだか嫌な予感がする。

その思いは徐々に私の心を侵食していった。

その日の午後五時。私はいつも通り……ではないが、涙くんの部屋に向かっていた。

四階にたどり着いた時、彼の部屋の方から声が聞こえた。近づいて聞き耳を立てると、中から男性の声が聞こえた。どうやら、昨日の検査結果を伝えているらしい。

そつと部屋の中を覗くと、そこには三人の人がいた。涙くん、白衣を身にまとった男性。きつと涙くんの主治医だろう。それと意外なことにこの所長、ユリ先生がいた。

しばらく男性医の話を知っていると、涙くんと目が合った。彼はすぐ時計に目をやった後、私に向かって申し訳なさそうな表情を見せた。幸い、ほかの二人はこちらを向いていないため、私に気づいていない。

「……と、ここまでが検査結果だ。何か質問はあるか？」

「いや、特にはないです。」

「そうか。それじゃあここからは私からの個人的な提案なのだが、瀬戸内 涙くん、コールドスリーブというものをやってみないかい？」

「コールドスリーブ……？」

コールドスリーブ。前にマンガ好きの男子が「コールドスリーブやべえ」みたいなことを言っていた気がする。

「コールドスリーブっていうのはな、体を凍らせて低温状態にするんだ。そうすることで体の老化を止められる。つまり、花咲病の進行が遅くなる。まだ研究途中だから、実験台になってしまうのだが。」

「なんでそんなことを僕に？」

「……君ももう気づいてるだろ？ここに來てからまだ二週間にもかかわらず、既に小さなつぼみができている。今までに花咲病にな

った人でも、ここまでの成長の早い人は一人もいなかった。このままだと、君の命はあと二週間も持たない。君ももつと長く生きていたいだろ？ コールドスリープは、今の段階ではどんな病気でも効くといわれている。やってみる価値はあるんだ。一年は延命できる。その間に花咲病の治療法が見つかるかもしれない。君のおばあさんから賛成を得ている。どうだ？ やってみたいと思わ……」

「嫌です。僕はずっとここにいます。」

きっぱりと否定した涙くんの目はとても鋭く、怖かった。

前も涙くんにここから逃げたいかと聞いた時も、否定していた。なぜそこまで、ここにすることにこだわるのだろうか。もつと長い間生きたいとは思わないのか。

「……そうか……。いや、私が勝手に提案しただけだ。そんなに深刻に考えなくてもいいのだが。今日の話はここまでにしようか。また来週な。ユリ先生、行きましよう。」

二人は立ち上がった。ユリ先生の表情はどこか悲しそうだった。「あれ？ 君、瀬戸内君に何か用があったのかい？ もう入っても大丈夫だぞ。」

「あ、はい。わかりました。」

「………」

「ごめんね。先生の話長引いちゃって。」

「ううん。大丈夫。何で話の時にユリ先生がいたの？」

「わからない。検査の時からずっといるんだ。ただそこにいるだけで、特に話もしなかったし。何なんだろうね。」

「………」

「………」

しばらくの沈黙。さっきの話で言っていた病気の進行状況が気になつてしまい、会話がうまく続かない。

「しおんちゃん、コールドスリープって、知ってた？」

「名前くらいかな。前に男子がコールドスリープやってみたって言ってた気がする。」

「へー。これが実用化されたらすごいよね。」

「……ねえ、涙くんの腕に咲く花って、どんなのかももうわかってるの？」

「わからない。僕あんま花のこととかわからないから。あ、しおんちゃんならわかるかも。女の子だし。」

「そういつて涙くんは右の袖をめくった。」

そこには、前見たような小さな葉はなかった。太くなった枝は右腕全体につるのように巻き付かれ、いくつかの細長い葉がついていた。そして茎が伸びた先、手首のあたりには小さな紫色のつぼみがついていた。

それは、私のよく知っている

「紫苑………？」

「ほんと？」

「うん。茎と葉は普通の紫苑よりすごい大きいけど。たぶん、そう。」

「……へえー。そっか。よくわかったね。………そっかあ。」
涙くんは何かを考えているように思えた。

「うわっ、まぶしっ！」

朝、目を開けるとまぶしい光が飛び込んできた。どうやら昨日、カーテンを閉めるのを忘れたらしい。

時計の針は七時を示していた。

私は顔を洗い、着替えた。時間もいい頃なので、食堂へ向かうことにした。

でも、足は踏み出せなかった。

「………食堂って、どこだっけ。」

初めてだった。こんなことまで、忘れてしまうのは。

毎日行っている食堂のはずなのに。足が震える。めまいがする。そのまま私は座り込んでしまった。

周りの声が聞こえない。怖かった。ただ、ただ、怖かった。

「しおんちゃん？」

「………え？」

目の前に涙くんがいた。

「なんで涙くんがここに？」

「え？僕はちよつと先生に用事があったから下に行こうとしたら、たまたましおんちゃん見かけて。大丈夫？」

「あ……えつと、食堂の場所忘れちゃって。たぶん、病気のせい。」
「そっか……。僕と一緒にいこう。ほら、こっちだよ。」

手を伸ばすその姿は、どこかで見たことある気がして。

私は、これ以上病気の進行が進まないことを祈る。でも、それがかなわないことを、私は知っている。

最近、日が昇っている時間が、長くなっている気がする。

「そういえば、紫苑って、秋の花なんだってね。」

「そうだよ。私の誕生日が九月二十八日で、その日は紫苑が誕生花だから、しおんって名前がついたんだって。」

「へえ、じゃあ、僕の花は季節外れに咲いちゃうね。」

「え？そうなの？」

「あ………。」

「？」

「いや、何でもない。僕、あと二週間くらいで死んじゃうんだ。」

「!!」

そんなことを聞いたのは、初めてだった。あと二週間。それまでに私は何ができるのだろう。

「それで、僕、もうしおんちゃんに髪結んであげられなくなっちゃ

うんだ。ごめんね。」

そうか。昨日見た腕では、もう髪を結ぶのは難しそうだった。

「あ。もしかして最近、髪結ぶのつらかった？」

「いや、前にやってあげたのは、五日くらい前でしょ？その時は、まだ腕の半分くらいだったから。」

五日で腕の半分。相当な勢いだった。運命は変わらないのか。

今日はお母さんが来る日だった。雲一つない快晴だったので、一緒に散歩しようと思った。いつものように楽しく会話しながら。

その時の私は能天気だった。こんなことになるなんて考えもしなかった。

部屋に入ってきたお母さんの表情は少し暗かった。

「お母さん、どうしたの？気分悪い？」

「あ、ううん。大丈夫。今日は大事な話をしようと思って。」

この雰囲気、どこかで感じたことがある。どこでだろう。

「単刀直入に言うと、あなたは父さんと母さんの子じゃないの。」

「……うそでしょ？」

「ほんとだよ。」

信じられなかった。信じたくなかった。

なんで？今までずっと隠してたってこと？どうして？

たくさん言葉が頭をよぎるけど、それが声になって私の体から出ることはなかった。

「しおんが事故に遭う前は覚えてたんだけど、今はもう、忘れちゃってるみたいだったから。」

「なんで忘れてることを、もう一度言おうと思ったの？そんな悲しい話、しなくてもいいのに。」

「このことを知ってもらってでも、あなたに思い出してほしいことがあるから。ちゃんと話を聞いて。」

あなたは、生まれてすぐから五歳の時まで、孤児院、今では児童養護施設っていうのかしら、そこにずっといたの。それで、五歳の時に私たちが里親として引き取った。

最初の一年くらいはずっと緊張してたわ。でも、すぐに打ち解けられて。それから、三人で楽しく毎日を過ごした。学校でもお友達がたくさんできて。あなたを引き取って本当に良かったと思っただ。

でも、あの時は来てしまっただ。あなたは誕生日の日の学校の帰り道に、トラックにひかれて救急搬送された。緊急手術をした。でも、あなたは目を覚まさなかつた。

「え……？」

目を覚まさなかつた？じゃあ、なんで私はここにいるの？

「いや、あなたはちゃんと目を覚ました。ただ、事故に遭ってから一年後なんだけだ。」

「一年後？そんなの聞いてないよ。私は少しの間しか気を失ってなかつたんじゃないの？」

「うん。あなたには言っていないだけで、ほんとは一年間ずっと寝ていた。いわゆる植物人間状態で。」

じゃあ、もしかして、と一つの考えが私の脳裏をよぎる。

「私って、ほんとは高一ってこと……？」

「うん。そうだよ。あなたはほんとは、今年の春で高校二年生。それで、あなたにもう一つ、伝えたいことがあつた。」

あなたには、双子の兄がいる。もちろん高校二年生の。あなたは事故で忘れてしまったみたいだけだ。」

「!!」

双子。そんなこと、一ミリも覚えてなかつた。

「その子との写真とか絵とかが入った箱を、あなたはずっと大事にして。それを今日は持ってきたの。はい。開けてみて。」

そう言っただ、彼女は一つの小さな箱を私に渡した。

箱を開けると、折り紙や紙切れがたくさん入っていた。二人で描

いたような絵に汚い字で書いてある手紙のようなもの。その中に、一枚の写真があった。その写真は、半分が引き裂かれていた。

「これは？」

「昔のあなたよ。私たちが引き取る前の日に撮った写真。ほら、髪に紫苑の花のピンつけてるでしょ。今もつけてるそれ、この時にもらったものなのよ。」

「どう？わかった？あなたについて。今、私から話せるのはこれが全部。」

「うん。なんとなく。」

「それじゃあ、また来週。」

「じゃあね。」

そこには彼女の言葉にいつもある、「しおん、またね。」という単語はなかった。

雲の隙間から月が見え隠れする。

さっきはいろいろなことを言われて、頭が軽く噴火しそうだった。一番驚いたことは、私に双子の兄がいること。でも、これで分かったこともある。

あの夢について。

お母さんに連れていかれる夢。あれはきつと、孤児院を出るときのこと。ということとは、私と一緒に泣いてた子がきつと。でも、どうしてあんな夢を見たんだろう。私は何も知らないはずなのに。

そして、あの子はどんな子だろう。今、何してるんだろう。新しい家族と楽しく暮らしているだろうか。私の分まで生きてくれるだろうか。

死ぬまでに会えたらいいなあ。

ただただ、死を待ちながら眠りにつく夜。

ピ、ピ、と電子音が規則的になっている

ここは病院だろうか

手首から細い管が出ている

脳が少し痛む

横には大きな窓があつて、廊下の様子が見える

突然、廊下の方から騒音が聞こえてくる

誰かが暴れているようだ

病院では静かにしてほしいものだ

その声は、どンドンこちらに近づいていた

窓の端から声の主の姿が見える

その姿は、私のよく知っている

涙くんだった

目を開ける。天井は、見覚えのあるいつもの部屋のものだった。

あの夢は何？

彼は、髪こそ黒いが、この二週間毎日見ていた涙くんだった。

なんで涙くんが？

外は真っ暗だった。

今日はもう眠れそうにない。

でも、

「それ」は来た。

彼は泣き叫んでいた

そのきれいな顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた

目は今まで見たことがないほど怖かった

後ろから、女の人に羽交い絞めにされながらも

何かを必死に叫んでいた

でもその声は私には届かない

すると彼は腕を振りほどき、女の人を蹴り飛ばしてこちらに近づいてきた

その顔はいつもの涙くんだった

どこか切ない目をこちらに向けて

ガラスに手を伸ばす

私もその手に自分の手を重ねたい

でも、体は言うことを聞かなかった

彼はゆっくりと口を動かした

『 ま た い ま つ か 』

その日の天気は、少し雲が多かった。いつも通りの景色だった。昨日の夢は何だったんだろう。涙くんはまたいつか、と言っていた。あれはきつと、事故で病院にいたころの話。どうして彼は、あんな表情をしていたのだろうか。

でも、所詮は夢だ。昨日いろいろ言われて、頭が混乱していたのだろう。

部屋に涙くんの姿はなかった。散歩でもしているのだろうか。好奇心から、部屋の中に入って彼の棚を探る。涙くんのベッドのすぐ脇にある、三十センチほどの小さな棚だ。

一段目の棚を開けると、中には髪ゴムがきれいに整理されてはいっていた。よく見る黒いやつから、ピンクできらきらしている涙くんが買わなそうなものまで。半分くらいは、飾りがついていた。どの飾りも、小さなチャームが一つだけ付いたものなどシンプルだった。ピンクのきらきらが異様に目立つ。数えきれないほどの髪ゴムの中の九割ほどは、新しそうなものだった。でも、残りの十個ほどは使い古されて、切れかけていた。なんでこんな使えなさそうなものがあるんだろう。

二段目の棚には、私がいままでいるようなピン止めがきれいに並べられていた。それらはすべて、花の飾りがついてあった。どれも女の子がしそうなものだった。普段はあんまり見ないけど、いつ

使っているんだろう。それに、すべてが錆びかけていた。一段目の棚にあったものといい、これといい、なんでこんなものを持っているんだろう。

まだ涙くんが帰ってくる気配はなかった。最後の棚も見てしまおう。

その棚は、鍵穴がついていた。でも、カギはかかかっていないみたいだ。ゆっくりとそれを引く。他のと比べて立て付けが悪かった。最後まで開け、中身をのぞき込む。

「これって………」

中にはたった一つの髪ゴムがあった。紫のゴム。白い鈴。『S.R』と書かれたチャーム。私と涙くんをつなげてくれたあのゴムだった。その段にはそれしか入ってなかった。私はそのゴムを手取る。丁寧に扱われているようだった。前に見たときにも思ったが、どこかかけている感じがする。なんでだろう。

この段には他に何も入ってないのだろうか。少し不自然だと思った。

しばらく見ていると、奥に一つの紙のようなものがあることに気づいた。手を伸ばしてそれをとる。

「………！」

それは写真だった。小さな男の子が一人写っていて、半分は切り裂かれているように見えた。そしてその子は、夢に出てきた涙くんにそっくりだった。まあ、当たり前か。彼の棚だし。

そういえば、と思って服のポケットからあの写真を出す。昨日見た例の箱に入っていた昔の写真だ。これも、端が切り裂かれている。

二つを見比べると、背景がとても似ていた。

まさかな、と思いながら、二つの写真の端をつなげる。

「っ！」

気づいた時には、すでに走り始めていた。

もう戻れない。分かっていた。でも……。

外はいつの間にか暗くなっていた。時計を見ると、夜の十一時を回っていた。夜ご飯、食べたっけ。

手には二枚の写真があった。一枚は、小さな女の子。もう一枚は、同じ年くらいの男の子が写っていた。その二人は、切り裂かれたところに向かって、手を伸ばしていた。

私たちは、手をつないでいた。

さっきまで絡まっていた糸は、一本にぴんと張られた。

私の双子の兄は————涙くん、君だった。

そうすると、今までのことについても説明がつく。

——今まで君が見せてきた、悔しいような表情。

——君がずっとここにいたい訳。

今では、すべてわかってしまう。

私たちは前にも逢っていた。ずっと一緒にいた。

………なのに、私は覚えていられなかった。たった一

人の、私の、家族。

悔しかった。悲しかった。やりきれない気持ちがある。渦を巻く。

もう君は、私のことをあきらめていたのだろうか。

なんだか涙くんに会いたくなっていた。

今、会わないと、もう君に会えない気がした。

暗闇へ足を踏み出す。

『花咲病、研究結果』

そのページの一番下にある「PR」をクリックする。今まで一度も見えてこなかった、関連する記事の部分。

『夢忘症——むぼうしよう、について』

時刻は十時半。消灯時間はとくに過ぎている。外を見ると、大きな月が輝いている。昼間とは違って、雲一つなかった。

パソコンに目を移す。この研究結果は、一か月くらい前に先生からもらったものだ。

『一・夢忘症とは

何かを思い出す代わりに、すべてを忘れる難病。思い出すことは、脳への障害で消えてしまった記憶。大事なもの、事、人など。

二・症状

夢の中で思い出したいことの断片的な映像が見える。夢を見るときは、突然眠気が襲ってきて倒れることがあるので注意。本人がすべてを思い出すまで症状は続くこともある。死ぬまで続くこともあるので、様々だ。』

そこまで読んで、パソコンを閉じた。情報があいまいだ。使い物にならない。

でもまあ、これで確定だろう。彼女の本当の病名。

それは————夢忘症。

ここで初めて会った時、彼女は笑顔だった。まるで、すべてを忘れてしまったかのように。

それは嘘ではなかった。君は、すべて忘れていた。二週間前、目が合った時、彼女は純粹な目をしていた。花のようなきれいな笑顔は変わってなかったが。

ショックだった。君だけが僕の家族なのに。君だけが、僕の理解者だったのに。

でも、僕と君は何かでつながっていたんだろう。君は、この部屋に来てくれた。あのゴムを持って。

それから、十年の溝なんてなかったかのように楽しく過ごした。

思えばあの十年間は本当に、最悪だった。

君と離れて引き取られた家は、夫婦喧嘩が絶えなかった。二人ともけんかで気分が悪くなると、矛先を僕に向けてきた。学校に行くと、「なんでお前、男子のくせに髪長いんだよ」と罵られ、暴力を振るわれて。死にそうだった。生きる意味が分からなかった。

その後、虐待が発覚すると、僕はもう一度あの家に行った。たく

さんの大人がいるのに、誰も僕を見てくれない毎日。

でも、その期間は思ったより短くて。最初の家のおばあちゃんが手を差し伸べてくれた。

それからの三年間は、平和だった。体中の傷もほぼ消えて。だが、あの事故が君を襲ってしまった。すぐに病院に駆けつけた。でも、君は眠っていた。僕は何も、できなかった。一年間、ほんちに長かった。

そのあとが、本当の地獄だった。君は僕のことを忘れていた。覚えていなかった。毎日、毎日絶望していた。ああ、僕の家族はもういないんだって。そのころから肘に違和感があった。

それから四年後、僕らはまた、再会した。いや、君からすれば初めてか。

君が僕の隣にいただけで満足だった。うれしかった。楽しかった。そこには永遠があった。

……でも僕は、もうダメそうだ。

右手首を見る。それは、大きく膨らんで、開きかけていた。もつて後、一、二時間だろうか。

最期に君に会えたら。でも、もう真夜中だ。君にはもう、会えないだろう。

そうだ。最後にあの写真でも見るか。僕と君が写っている唯一の写真。まあ、君の方はないけど。

右手でそれに手を伸ばす。右腕は、持ち上げるのでも大変だった。あと九センチ。そのとき。

突然、右手に激痛が走る。耐えられず、手をだらんと下げる。手が当たった棚は床に落ちる。中から、たくさんの髪飾りが出てくる。全身が重く、つらい。

ああ。もうだめか。

最期に君に願うとするなら。もう一度、

僕と笑ってほしい。

ゆっくりと目を閉じる。

視界の端に、君の茶色がかった髪が見えた。

「っはあ、はあ、はあ………あっ！」

足がもつれる。前に倒れる。

「った………まだ、まだ」

立ち上がる。まっすぐ前を見る。足を踏み出す。

あれからのくらい走ったのか、わからない。涙くんの部屋に向かっているつもりだけど、同じところをぐるぐる回ってるかもしれない。

でも、絶対にたどり着く。という確信はあった。

「……………！」

前方から物音が聞こえてくる。ガタン！という何か大きなものが落ちたような音だった。

「っ！………はやくっ………行かないとっ！」

走る。がむしやらに。ただただ、前を向いて。

「ついたっ………はあ、はあ、はあ

………え？」

彼は、だらんとうなだれていた。その右腕には、大きな紫音の花が咲きかけていた。

私は焦り、さつきとは違う汗が頬を伝う。

必死に右手を持ち、その手をさする。

「まだ………まだ死んでないよね？花、咲ききってないよね？」

もし、君がわたしと同じ家に行っていたら

もし、わたしが君のことを忘れなかったら

もし、君がわたしにもっといろんなことを教えてくれたら

もし、わたしがもっと長く生きられていたら

私たちはもつとずっと一緒にいられたらどうか

目を覚ますと目の前に知らない人がいた。

私はその人の手を強く握っていた。

その人の髪は長く、白かった。

今初めて会ったはずなのに、どこか懐かしい気がする。

相手の右手からは、ありえない大きさの紫苑の花が咲いていた。

今まで見た花の中で一番美しかった。

私は立ち上がり、周りを見渡す。

昨日は何をしてたんだっけ。

まあ、いいか。

とりあえず、自分の部屋に戻るために私は歩き出す。

部屋を出る直前、もう一度あの紫苑を見る。

「そういえば、もうそろそろ桜の時期だなあ。」

季節外れの紫苑は、ただ微笑んでいた。